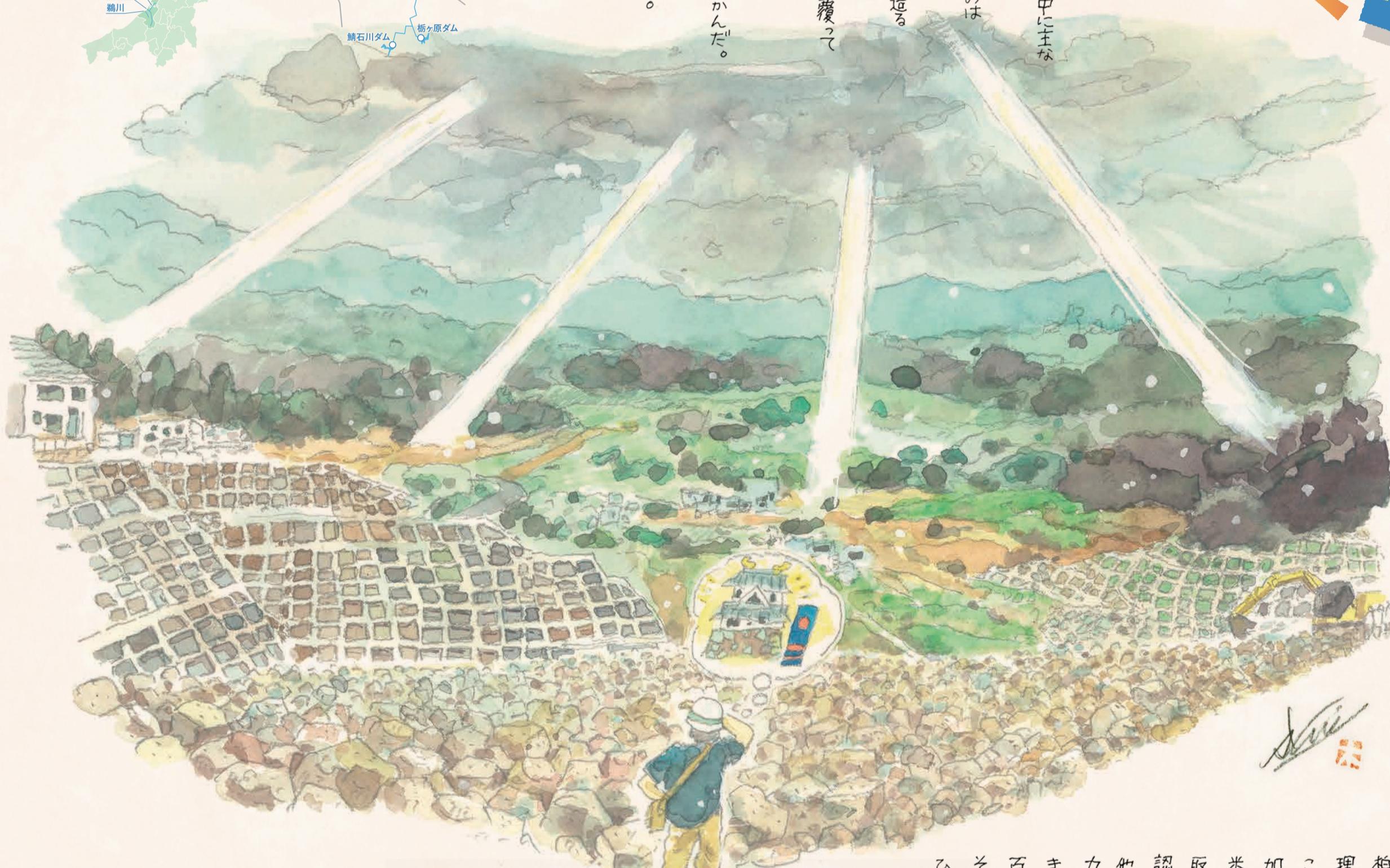


新潟の原風景といえば、どこまでも広がる豊かな水田。この景色は、確かに行き渡る水があって作られています。これは、水と農業、そして新潟の未来を考えるシリーズです。



木原四郎の 水利を歩く in 柏崎

新潟市在住のイラストレーター木原四郎さんが柏崎地域を支える水の流れを訪ね歩き、風景や人とのふれあいを描いていただきました。



柏崎の大豆育種組合に伺い

理事長の石黒芳和さんに会った。

ここでは新鮮な農作物と特産の加工品を出荷している。

米は有機無農薬と減農薬栽培に取り組み、すべて「特別栽培米」の認定を受けている。

カリフラワー・ブロッコリーなども栽培。

また、冬期湛水を始めた田園には

百羽以上の白鳥が羽根を休めるといつ。

その景観は農作業の合間の心休まるひとときだそうだ。

他に、えだまめ・マコモタケ・オータム・ボエム・

カリフラワー・ブロッコリーなども栽培。

また、冬期湛水を始めた田園には

百羽以上の白鳥が羽根を休めるといつ。

その景観は農作業の合間の心休まるひとときだそうだ。



新潟大学名誉教授
いとう ただお
伊藤 忠雄さん

1944年、新発田市生まれ。67年、新潟大学農学部卒。専門は農業経営学。同大教授、副学長などを経て2010年に退職。15年3月まで放送大学新潟学習センター所長。12年から5年間、県内の先進的農業経営者を講師に招き、実践的経営論を議論する「新潟農業経営塾」を主宰。現在、新潟市農業活性化研究センター名誉所長として新潟農業の課題などを問題提起している。

刈羽の平野は間もなく背後に三つの農業水利ダムを抱えることになる。既に二つのダムは完成し、残る市野新田ダムが竣工（じゅんこう）すれば、この農地の多くが国営事業による二つのダムに支えられる全国でも特色ある土地柄となる。

猛暑の今年、完成したダムの放流によって、下流域の稻田は救われた。今後、県営ほ場整備事業などの関連事業が完了すれば、柏崎刈羽地域の農業は基幹作物のコメだけではなく、タマネギ、枝豆なども豊かに育つ新たな時代を迎える。

刈羽の平野は間もなく背後に三つの農業水利ダムを抱えることになる。既に二つのダムは完成し、残る市野新田ダムが竣工（じゅんこう）すれば、この農地の多くが国営事業による二つのダムに支えられる全国でも特色ある土地柄となる。

猛暑の今年、完成したダムの放流によって、下流域の稻田は救われた。今後、県営ほ場整備事業などの関連事業が完了すれば、柏崎刈羽地域の農業は基幹作物のコメだけではなく、タマネギ、枝豆なども豊かに育つ新たな時代を迎える。

寡聞にして知らなかつたが、「ダムカード」が結構人気を呼んでいるといふ。全国に収集マニアもいるらしく、柏崎周辺農業水利事業所でも用意したカードが昨年度分は底をつき、本年度も用意した2000枚が既に配り終えたという。

寡聞にして知らなかつたが、「ダムカード」が結構人気を呼んでいるといふ。全国に収集マニアもいるらしく、柏崎周辺農業水利事業所でも用意したカードが昨年度分は底をつき、本年度も用意した2000枚が既に配り終えたといふ。





有限会社 山波農場 代表取締役
山波 剛さん(柏崎市)
久米、細越の3集落にある農地の7割を耕作する農業法人。農家としてもちろん、企業としても地域最大で、水管理を一手に引き受けています。大潟水とつながった今年8月、一帯は完全に水が枯れた状態。柏崎市の消雪用井戸から水を分けてもらい何とかしました。「集落の全ての田んぼを救おう」としましたが、水源から遠いところは厳しかった」と山波さんは振り返ります。さまざまなコメの品種を栽培することで水が必要な時期を分散していますが、そうした努力が無くなるくらい雨は降りませんでした。

今年の窮状は、外国産米を緊急輸入した1993年の大冷害以来だと言います。少子高齢化で農業法人が農地の扱い手、地域雇用の受け皿となっている地域では、農業法人の経営危機は、地域存続の危機につながります。「建設中の市野新田ダムの稼働は2020年。この地域に水を引けるようになるまではさらに10年かかります。導水にはうちだけでなく他の地域の動向も関わってきます。『ダムは無駄だ』と言う人もいるけど、今年のような水不足の時にこそ必要なんです。それを全国の全ての人に分かってほしい」と強調しました。

畔屋生産組合 代表理事
宮嶋 良恵さん(柏崎市)

タマネギを導入し
年2作で収益アップ



親子ダム見学ツアー
in柏崎市
体感

藤井頭首工と柄ヶ原ダムを見学し、その役割や歴史を学んだ「親子ダム見学ツアー」。「取水や配分方法を巡り争いが繰り返されてきた」といった説明に耳を傾けながら、参加者は刈羽平野の農業用水の変遷に思いをはせました



機械作業、乾燥出荷はJAがやってくれます。大豆と組み合わせることで、1年に2回収穫できます」と話します。もちろん収益力があるのも魅力です。実証実験を行った約2haのうち半分には地下水位の自動調節弁が取り付けられており、「田んぼで園芸をやるのはとても便利」と指摘します。組合の耕作地は2002年までに耕地整理を終えていますが、まだ渾れない地域の農地も少なくありません。「作業効率が悪い耕地は、われもなかなか引き受けられません。土地改良をさらに進めてほしい」と語る宮嶋さん。「6月の収穫はほぼ機械作業で、期待を寄せていました。

水と農地を守り 持続可能な地域へ

柏崎刈羽地域は、海に面したイメージが強いかもしれません、内陸に深い形をしており、十日町市と境を接しています。比較的なだらかな平地が続く一方、深い山は少ないうえ大きな川もなく、江戸時代から稻作は水を確保する闘いでした。過疎高齢化が進む地域で、水と地域の農地を守る取り組みを紹介します。

頭首工とダム見学
親子で役割を学ぶ

夏休みまだ中の8月5日、柏崎市で藤井頭首工と柄ヶ原ダムを見学する親子ダム見学ツアーが行われ、市内外の親子連れ約30人が参加しました。

藤井頭首工は鯖石川下流800haの農地に用水を供給するための施設。藤井堰(ふじいぜき)とし

ては与板城主直江兼続による新田

開発が起源とされ、およそ400

年の歴史を持ちます。大きな河川

も深い山並みもない柏崎は、昔か

ら水不足に陥りやすくなっています。

記念碑には「用水の滴が血の一滴」と刻まれています。一方、柄

ヶ原ダムは鯖石川水系に2010

年完成した農業用水ダムです。下

流域地1740haに安定的に用水

供給されています。

市内の親子連れは「地元に住んでいますが、農業用水のためのダムが柏崎にあることは全く知りませ

んでいた」と驚いていました。

「水を使わなければ生き残

れない」と語りました。

「地元に住んでいますが、農業用水のためのダムが柏崎にあることは全く知りませ

んでいた」と驚いていました。

「地元に住んでいますが、農業用水のためのダムが柏崎にあることは全く知りませ